

投句欄 自由律の泉 ⑤

- 1 不都合な真実はシュレツダーの餌になる 久光良一
- 2 味ない煎り大豆の味が父 大岳次郎
- 3 からっ風折りたたむ旅支度 野谷真治
- 4 見えない目が見ている青盲の杖音 小山榮康
- 5 たばこぎつしりの箱をひろう禁煙の手 無一
- 6 船旅ふなたびの汽笛きてきが響く港みなとまち 和崎はると
- 7 青空の雲自由自在にかたち変え 田中美太
- 8 待つ理由が分からない目を半分閉じる 白松いちろう
- 9 灯火管制 息を殺して生きていた 富永鳩山
- 10 お地蔵様の前掛け朽ちたままふるさとのお正月 富永順子
- 11 カルテの履歴 行ったり来たりする振り子 金澤ひろあき
- 12 開戦日兜太に似ている冬木一本 井尾良子
- 13 仕事始め賑やかな休み時間の真ん中にいる ちばつゆこ
- 14 空っ風の風の刃襟足を掠める 佐瀬広隆
- 15 女つてたどり着いた化粧室が行列 佐川智英実
- 16 補助輪つけ春が走りだす さいとうこう
- 17 忘れていた匂いへ伸びるひこばえ 部屋慈音
- 18 過去をわかって親父が飲んだ酒 荻島架人
- 19 着ぶくれて次の言葉がでてこない 棚橋麗未
- 20 うかうかと生きて十文三分の靴あと 平岡久美子
- 21 落ち椿刻印となる別れ 黒瀬文子
- 22 Hey Maria I'm a Fat Man 檜 幽可

## ● 泉④より 一句鑑賞

なんだか今日は斜めに割ったチョコレート

佐川智英実

▼食べてしまえば、かたちなんかどうでもいいのだけれど、斜めに割られたチョコレートは見た目に落ち着きがなくて、なんだかすつきりしない感じがする。今日という一日におきた波立つ感情がうまく表現されている。(久光良一)

▼チョコレート占いか。あの硬さは、確かに、カメのこうらのように思う。板チョコレートの割れたその割れ方が今日の私なのだろう。きちんと割れるように割れば幸せなのだろうが、斜めに割れたら、それも「吉」かもしれない。(大岳次郎)

▼毎日がきれいに割れたチョコレートのように整然と予定通りに行くのがあたり前だと、私達は思い込んでいた。そうならない時の驚きや嘆き、違和感が「チョコレート」の表現を通じ、リアルに伝わってくる。(金澤ひろあき)

▼いつもは決まった形のチョコレート一片をコーヒートと一緒に楽しんでる。今日はこれまでの習慣を打ち破って斜めに割ってみよう。何か新しいことが始まるかもしれない。期待や希望を求める気持ち伝わってくる。(白松いちろう)

▼なんだか、という心模様。斜めに割った、とそれを表したいつもの好きなチョコレート。そんな自分が出てきた日、私にもそんな日があるとしっかり共鳴した。(部屋慈音)

▼前回二十一編の中に第一番に若さを見付けた作品です。バレンタインデーに女性から男性に贈物をする風習が、一九五八年頃より流行しはじめた、その贈物の一番の主役のチョコレートであるが、作品の「今日は斜めに割ったチョコレート」には、若さがこめられていて、一読、実に微笑ましく感じた作品である。余韻というか、余情というか、割れたチョコレートに言葉もなく、乙女心が揺れているのが、何となく想像出来て、微笑ましく、羨ましいナーと思いました。魅力ある若さの作品で、清新な雰囲気魅かれました。(棚橋麗未)

奥入瀬に喝采沸く英語や中国語や 白松いちろう

▼昨年の五月中旬、退職記念にと念願の「日本一周九日間の船旅ツアー」で、初めて青森、秋田を旅行した。十和田湖から流れ出る湖水が、奥入瀬溪流になっていて観た。どこの観光地も外国人客で賑わっていました。(和崎はると)

一夜あけて悲しみの濁流 ちばつゆこ

▼真に句の如し、鬼怒川の濁流稲田に渦む、骨太い句と思います。(小山榮康)

▼辛い絵を画面で知りました、もし進路が、少しそれていた

らと、ぞつとしました。

(田中美太)

情のうすい親の因果かサナギの子

松岡月虹舎

▼命をたたれる事件もですが、大人になるまで成長できても持っている才能に誰にも気がつかれず、サナギのまままで終わる運命がいかにも多いことかと考えさせられる句です。

(佐川智英実)

拳の中に涙を隠す

田中美太

▼生きているとぐつと我慢してこらえなくてはならないことが何と多いことか。そんな時ぬぐった拳の中の涙をぐつと隠してけなげに生きる。でも時々思い切って流してもいいのではないかしら。

(井尾良子)

▼お強い方と思いました。真に強い方、と。

(無 一)

ひとりぼっちの柿を食う

富永鳩山

▼ひとり留守番のおやつに、奥様が剥いて置いてくれた柿を食べる！ 口いっぱい柿の甘さが広がります。留守番のご褒美です。

(ちばつゆこ)

▼柿も、ひとりぼっちを感じる時があると、思うと、面白い。ひとりぼっちの作者が、柿を食べたのだろう。柿は、どんな味だったろうか。

(野谷真治)

コスモスの中に煙になりに行く

棚橋麗未

▼そのまま、読ませていただければ「もうじきたばたしない」来

るものをすんなりと受け入れるだけと読めないことはない。しかし「コスモス」である、秋桜、でも「こすもす」でもないところに引つかかる、もしかしたら、コスモスを地球、そして宇宙の不変ととらえて人はみんな自然の中へ戻っていく。

(平岡久美子)

踏み石の陽だまりにふくらむキリギリス

平岡久美子

▼自宅の陽当たりの良い縁側の上がり口の大きな石の上であろう、一匹のキリギリスが全身に陽を浴びて、何時までも動こうともせず、まったりとしている景色を、ゆつたりと眺めている詠み人の様子が窺える。

(檜 幽可)

## ● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉 〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール [kumiko801@wh-wing.net](mailto:kumiko801@wh-wing.net)

〈締め切り〉 2020年3月15日

★「自由律の泉」と協会公式ツイッターの連携が始まります。

詳しくは4ページをご覧ください。